

戦前期日本のデザイン界における 第一次世界大戦ポスターの受容と影響

田島奈都子

TAJIMA Natsuko

青梅市立美術館 学芸員

【要旨】本稿は「大戦ポスター」としばしば称される、第一次世界大戦期に欧米で製作されたポスターが、同時代以降の日本のデザイン界においてどのように受容され、影響を与えたのかについて、具体的に立証することを目的としたものである。

戦前期の日本における大戦ポスターの公開は、1916年10月に神戸高等商業学校（現、神戸大学）において開催された「広告絵札展覧会」を嚆矢の例として、1945年8月までの間に20種を数える。一方、図版としての紹介は、同年4月に発行された『日本印刷界』第78号を初出とし、以降の記事には作品図版を伴うことが多かった。ただし、大戦ポスターが全国的に知られる存在となった最大の原因は、1921年に朝日新聞社が地方版発行地域で行った「世界大戦ポスター展」の巡回と、その記念図録的な『大戦ポスター集』の刊行にあり、この二つは日本における大戦ポスターの翻案化にも多大な影響を与えた。

現在確認されている、大戦ポスターを翻案とした最も古い作例は、ジェームス・モンゴメリー・フラッグによる1917年の《アメリカ募兵ポスター》を下敷きにした、1919年6月28日の『大阪朝日新聞 神戸附録』に掲載された《岡部印刷事務所の新聞広告》である。もっとも、大戦ポスターの翻案化が増えるのは、先に挙げた『大戦ポスター集』の刊行以降である。また、引き写される媒体としては、ポスターよりも製作機会の多い、新聞広告や絵葉書が選ばれる傾向にあり、識者の評価は低かったものの、アメリカのポスターの方が、欧州の作品よりも翻案化されることが多かった。

いずれにしても、1910年代半ば以降の日本における大戦ポスターは、作品を見る機会が国内で広く担保されたことに加え、それが当時の日本人にとっても関心の高い、世界的な出来事に際して製作されたものであった事実と、デザインの新鮮さが相まって、新たなグラフィック作品を創造する際に積極的に翻案化された。

How Were World War I Posters Embraced by the Design Community
in Pre-war Japan, and How Did They Inspire Japanese Designers?

Abstract: This paper aims to elaborate on how so-called “war posters” created in Europe and America during World War I were embraced by the Japanese design community of that time, and how these posters inspired Japanese designers.

The first instance of exhibiting war posters in Japan before World War II was “Kokoku Efuda Tenrankai” (Exhibition of Advertising Posters) held at Kobe Commercial College (today’s Kobe

University) in October 1916. Twenty exhibitions followed during the years through August 1945. Meanwhile, the first pictorial representation of war posters appeared in the magazine Nihon Insatsu Kai (Japan Printing Industry), Issue 78, published in April 1916; after that, magazine articles often featured illustrations. The primary factor contributing to the nationwide publicity of war posters was, however, the war poster exhibition tour organized by the Asahi Shimbun Company in 1921 in areas where the company produced local editions, followed by the publication of Taisen Posuta Shu (War Posters), a commemorative pictorial record of the exhibition. These two events also had a significant influence on the trend of adaptation from war posters in Japan.

The oldest confirmed example of a war poster adaptation in Japan is an Okabe Printing Office advertisement that appeared in the Kobe Supplement of the Osaka Asahi Shimbun on June 28, 1919. The advertisement was adapted from James Montgomery Flagg's famous Uncle Sam recruitment poster created in 1917. But the real rise of adaptations did not occur until the publication of War Posters mentioned above. In many cases, war posters were adapted for newspaper ads and picture postcards produced in large quantities rather than for posters, and American posters were used for adaptation more often than European ones, even though experts placed little value on the former.

In summary, the Japanese public had opportunities to view war posters throughout the country from the mid-1910s. These posters were created on the occasion of globally important events that were also of interest to the Japanese, who found something new in the design of the posters. These factors encouraged Japanese graphic designers to enthusiastically adapt war posters for their own productions.

I 本稿の目的と既往研究における「大戦ポスター」

本稿は「大戦ポスター」としばしば称される、第一次世界大戦期に欧米で製作されたポスターが、同時代以降の日本のデザイン界においてどのように受容され、影響を与えたのかについて、具体的に立証することを目的としている。

戦前期の日本のデザイン史や広告史に関する既刊本を概観すると、大戦ポスターとその公開に関する事項は必ず言及されている。事実、こうした研究における底本となっている『日本の広告美術 明治・大正・昭和1 ポスター』には、日本のデザイン史について著書を持つ山名文夫が、「概説・日本の広告美術」の中でわざわざ一項を設け、1921年に朝日新聞社と読売新聞社がそれぞれ主催した展覧会について、当時それを鑑賞した人物の感想を交えた記述を⁽¹⁾しており、広告学者の津金澤聡廣は『日本の広告』の中で、先に挙げた両新聞社が主催した展覧会以外に、後藤新平や三輪善兵衛が収集した大戦ポスターのコレクションがあったことや、それらの公開についても言及⁽²⁾している。また、現在は和歌山県立近代美術館にて館長を務める山野英嗣は、数ある「大戦ポスター展」の中でも、特に1921年に朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」に着目し、同展を一種のメディア・イベントとして捉えた上で考察を加えて⁽³⁾おり、大戦ポスターと「大戦ポスター展」という存在は、各時代・各分野にとって興味深い対象のようである。そしてこの傾向は、今世紀に入っても見られ、また新たな段階に入っている。

2006年6月、東京大学において開催されたシンポジウム「ポスターの時代 戦争の表象」は、さまざまな角度から大戦ポスターを検証するものであり、筆者もパネリストの一人として参加した。また、その翌年には印刷博物館において、東京大学大学院情報学環が所蔵する第一次世界大戦期のプロパガンダポスターコレクションを公開する「モード・オブ・ザ・ウォー 第一次世界大戦期プロパガンダポスターコレクションより」展が開催され、同展図録には公開に先立つ調査研究の一端が収録された⁽⁴⁾。その他、2008年に京都国立近代美術館を皮切りとして、国内3会場で開催された「ドイツポスター展」においては、朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」に展示された作品を継承している、京都工芸繊維大学美術工芸資料館の所蔵品の中から、ドイツ製の大戦ポスターが数点紹介された⁽⁵⁾。

一方、論文としては、心理学的手法を用いてアメリカ議会図書館が所蔵する大戦ポスターを分析した、土田泰子による「第一次世界大戦期における米国プロパガンダ・ポスター—イメージとプロパガンダー—」⁽⁶⁾や「戦時ポスターとプロパガンダ」⁽⁷⁾が挙げられ、筆者も近年、第一次世界大戦と大戦ポスターが、同時代の日本の製版印刷界にもたらした影響について論じた「戦争がもたらした製版印刷術の技術革新—大正期の日本印刷界と第一次世界大戦ポスター—」⁽⁸⁾を著している。

このように、大戦ポスターは製作から100年以上が経過しているにも拘わらず、今日の日本国内においても関心を集めている。しかし、過去の展覧会を概観してみると、2007年の「第一次世界大戦期プロパガンダポスターコレクション」には、影響を受けたはずの日本製ポスターの紹介が全くなく、一方、2008年の「ドイツポスター展」においては、「日本にみるドイツ近代ポスター:その受容と展開」の章が設けられ、ここではドイツ製の大戦ポスターと並んで、カルピス社が1922年に行った国際的な懸賞募集において入賞した、ドイツ人作家のポスターと杉浦非水らの作品が展示されていたものの、残念ながらそれだけに終始してしまい、章題として掲げられた日本におけるドイツ近代ポスターの受容実態は、必ずしも見学者には十分に伝わらなかったと思われる。

けれども、2006年のシンポジウム「ポスターの時代 戦争の表象」や、「戦争がもたらした製版印刷術の技術革新—大正期の日本印刷界と第一次世界大戦ポスター—」において、筆者が若干紹介したように、第一次世界大戦期に欧米で製作されたポスターは、それ以降の日本で製作されたポスターを筆頭とするグラフィック・デザインに多大な影響を与え、翻案作品の誕生を促したのである。

こうした現状を踏まえ、本稿においては大戦ポスターが戦前期の日本のデザイン界においてどのように受容され、影響を与えたのかについて、立証していくことにしたい。日本のデザイン界は開国以来、常に欧米の作品を模範とし、それらを糧として発展した経緯がある⁽⁹⁾。そしてそうであるならば、詳しくは後述するものの、さまざまな機会を通してその存在が知られるところとなった大戦ポスターは、初期から積極的に日本国内で受容されたはずである。従って、本稿においてはこの点について、具体的に次章以降で詳しく見ていくことにする。

II 戦前期の日本における大戦ポスターの受容

(1) 「大戦ポスター展」の開催

表1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」は、1914年7月の第一次世界大戦の

戦前期日本のデザイン界における第一次世界大戦ポスターの受容と影響

	入場者数	管轄	概要
			広告の必要性が高まる中、学究のためだけではなく、本邦商工業者の参考となすために行われた展覧会。ポスターは国内外の卒業生や在校生の協力を得て収集し、それを欧米の部と東洋の部に分け、前者に407点、後者に106点が展示された。なお、欧米の部は、ロンドンで収集された演芸27点、季節売出し3点、出版5点、国債20点、募兵28点、食料品24点、一般22点、旅行15点、航路18点、鉄道96点と、リヨンで収集された一般20点、アメリカで収集された一般2点、イギリス地下鉄道会社寄贈の117点の11部門に細分化され、大戦関係のポスターも多数展示された。展覧会終了後にもポスターは集まり、総数は600点以上に達し、展覧会終了後にポスターは学校に寄贈された。
	2,668人		本部が既に収集していた60点に加え、1915年に本社が開催した「世界ポスター展」に間に合わなかったポスターを中心に、英、伊、露、仏、スウェーデンのポスターを展示。英の募兵ポスターや露の軍車公債募集等の第1次世界大戦関係のポスターもあった。入場者数には比較的外国人が多く入場した。
	男性 14,060人 女性 6,932人 合計 20,992人		本省の命令によりアメリカに留学中の監学官乗杉嘉壽が現地調査した際に持ち帰った資料等の展覧会。その中には大戦ポスターも含まれていた。乗杉の留学報告である『参戦後の米国に関する報告』（文部省、1918年）にも、10点の大戦ポスターが掲載されている。
			神戸高等商業学校教授の中川静が収集した欧米各国を中心とするポスター534点を借用して展示。展示作品は108点が日本製であり、残りの426点が外国製のものであった。その内訳は、国債募集20点、出版12点、季節売出し3点、演芸37点、旅行15点、一般75点、食料品36点、募兵29点、地下鉄道60点、鉄道97点、航海17点、米国電車カード19点、仏国鉄道6点であった。入場者は3日間10時までの夜間開館して事もあって盛況であった。なお、18日には中川静の広告に関する講演会が行われ、商工業者、美術家、学校教員、新聞記者等数百人が来場した。
			神戸の日本交通公社が取り寄せた外国製400点と国内800余点が展示。最大のものは英国募兵ポスターで、内訳はポスター、各種包紙、電車内広告意匠と多岐にわたる。16日には神戸高等商業学校の中川静による広告印刷物に関する講演会があった。
			欧米に於ける各種広告物だけを蒐集して展示。日本交通公社からは電車や汽船会社の案内広告物、萬年社からは各種商店のピラ、毎日新聞社からは意匠の参考品、農商務省商品陳列館技師の小橋三雄からは電車用の広告物、日本印刷界社の島屋政一からは興行や祝日に関したものと、神戸高等商業学校で展示されたものも出品された。
			展示の内訳は飾窓、広告用建築物、夜間用広告設備、進物、その他一般広告を目的にした意匠品。フィラデルフィア市商品陳列館やニューヨークの広告代理店等に対して広告意匠関係物の収集及び送付を依頼。また、国内業者にも出品協力を商工業者に呼びかけた。参考品として古今内外の広告意匠に関する書画、印刷物、写真、器物、服装等、及び朝日新聞調査部が収集した米国防時ポスターと中川静のコレクションが出品された。
			学校創立10周年の記念事業として印刷物が主催。展示品は国産印刷材料、最近の印刷物、紙器、版面、印刷材料代用品等。参考品として各種ポスター、スタンプ、大戦にちなんだ米国防時・募債広告、ポスターが展示。国内ポスターも展示されていた。
			三輪善太郎が収集した電車用ポスターを中心とする米国のポスター700余点と、大阪府立商品陳列所が収集した200余点の海外ポスターが展示された。
			農商務省の派遣官が北米及びカナダで収集した戦時中の食料及び燃料節約、貯金奨励、並びに自由公債に関するポスター数百点が展示。ポスターに付けられたコピーは全て翻訳された。
			農商務省が米国で収集した食料、燃料制限、自由公債に関するポスター約140点が展示。多種多様で奇抜なものもあった。ポスターに付けられたコピーは全て翻訳された。
	4,300人		農商務省が収集したアメリカとカナダの大戦ポスター118点を借用して開催。
			後藤新平が前年外遊した際に集めた米国の大戦ポスター百数十点が展示された。展覧会に際して『米国防時ポスター説明書』が都市研究会より発行された。
			大戦ポスターが多数展示されたが、地元の意識が低くあまり振るわなかった。
			富田重吉が収集した戦時中にフランス政府が制作した公債募集、人民に愛国心を喚起するために作ったもの等、百数十枚のポスターを借用して展示。ポスターに付けられたコピーには翻訳が付けられた。
			前年に松岡博士が欧州から持ち帰った仏、独、蘭、西、英のポスターに加え、日本郵船客課と本部が収集していた数十点のあわせて120余点のポスターが展示。内容的には交通、遊芸、運動、商工業、美術等、各方面にわたっており、外国のものでは独のものが最も多かった。会場では第1次世界大戦の前と後のものが比較展示されていた。入場者は商工業者や印刷業者、図案家がほとんどであった。
	200,000人	大阪朝日新聞	オランダのナイホッフ書店が蒐集した第一次世界大戦中の新聞約50種、700冊を、朝日新聞社長の村山龍平が京都帝国大学教授原勝郎の依頼によって、時価2万円で購入したが、その中に百数十種、5,000枚のポスターが含まれていた。また、同社の米国駐在員であった内海幽水が、米国政府が大戦中に発行した大戦ポスター等を収集し、1918年7月に本社には本社に送付していた。こうして集まった英米独仏露の大戦ポスター6,000点の中から、会場ごとに300～400点を選び展示した。なお、展示されたものは欧米の大戦ポスターばかりではなく、それぞれの国の民間企業が当時製作したものや、大戦ポスター展の開催に併せて全国にポスターを出品するように呼びかけたため、それによって集まった日本のポスターも比較展示された。巡回地は大阪朝日新聞が地方版を発行しているところを中心とし、東京以外は全て無料で公開されていたが（東京では新聞の欄外に印刷されていた入場券が必要であった）、会場規模が異なるため、巡回した各地で展示内容が若干異なったようである。展覧会の開催に当たっては、会期前より各地の『朝日新聞』紙上で告知広告が打たれ、会期中はその様子を知らせる記事や地元名士や知識人による見学記等が積極的に掲載された。また会期中、「大戦ポスター絵葉書」が6枚組で3種類、各25銭で発売され、また優秀作171点を掲載した『大戦ポスター集』が7月半ばから予約受付され、9月に4円50銭で刊行された。
	87,500人	東京朝日新聞	
	12,000人	大阪朝日新聞（京都版）	
		大阪朝日新聞（神戸版）	
	500人（最初の3時間）	大阪朝日新聞（神戸版）	
	8,000人	大阪朝日新聞（東海版）	
	5,000人		
	3,500人	大阪朝日新聞（北陸版）	
	5,000人		
	10,000人弱		
	5,400人		
	2,500人（2日目だけ）	大阪朝日新聞（紀伊版）	
	1,600人		
	11,000人	大阪朝日新聞（岡山版）	
	2,000人（初日の午前だけ）	大阪朝日新聞（広島山口版）	
	12,000人		
	31,000人		
	3,500人	大阪朝日新聞（九州版）	
	2,000人（初日の午前だけ）		
		大阪朝日新聞（朝鮮版）	
			当初は守田文治の講演会として企画されていたが、現地で収集したドイツ、オーストリア、ハンガリー、スイスの第一次世界大戦関連のポスターが存在していたことから、講演会の内容を補充するものとして、会場内で大戦記念品と合わせて展示された。東京における朝日新聞社の「世界大戦ポスター展」のこともあり、結果的に展覧会的要素が強くなった。高原会から出版された『ポスター』は、「ポスター上」「ポスター下」「ぼすたーのまじ」の3冊で構成されており、1921年12月に9円で発売された前2冊には、展覧会に展示された作品の中から152点が掲載され、1922年10月に出版された後1冊に、守田の講演会内容を含む識者の5本の論評と、作品に関する解説が収録された。
			同所が収集した県内外の各種ポスター、包装紙、商標カタログに加え、農商務省商品陳列館、大阪府立商品陳列所、大分県商品陳列所、後藤新平、朝日新聞が収集した大戦ポスター等、約5,000点が展示。なお、朝日新聞社が提供したものは、全国巡回した大戦ポスターの一部であったが、会期中「大戦ポスター絵葉書」も販売された。
			東京帝国大学教授の益田元亮が収集し、同大文学部西洋史研究室が所蔵分を主体に、朝日新聞社が所蔵していた第一次世界大戦のポスター115点と、外務省囑託の鶴見三三博士が所蔵していたドイツの新聞、満州事変関係のポスターが展示された。大戦ポスターの内訳は、英9点、米23点、仏42点、独12点、伊5点、その他で募兵、募債、食料節約と多岐にわたった。『朝日新聞（東京版）』には9月6～16日まで、展示品を解説する10回にわたる連載や、会場の様子を伝える記事が掲載された。

開戦以降、第二次世界大戦が終了した1945年8月までの間に、外地を含む当時の大日本帝国において、開催された各種展覧会の中で、大戦ポスターが展示されたことがわかっているものについて、その概要をまとめたものである。これによると、その嚆矢の例は戦時中の1916年10月に、神戸高等商業学校（現、神戸大学）において開催された「広告絵札展覧会」にまで遡り、全体としては20種に及ぶ。⁽¹⁰⁾ただし、開催時期を見てみると、最後の一つを除いては、第一次世界大戦の開戦からその戦後処理が確定した1920年代初めに集中している。

一方、展覧会の規模内容に着目してみると、大戦ポスターにはいくつかのコレクションが存在し、それだけに特化した展覧会も存在した。しかし、今日あまり知られていないものの、その多くは比較検証の意味合いから、同時代の国内外のポスターや広告関係資料と一緒に展示されており、展示点数が数百点に上るものが少なくなかった。ましてや、展覧会に合わせて作品が相互に貸し借りされたり、複数箇所を巡回されたことは、これまでほとんど指摘されてこなかったものの、実際にはそうした例が多かった。

例えば、1919年に愛知県商品陳列館で開催された「食料制限及び公債募集米国ポスター展覧会」には、農商務省商品陳列館が所蔵する同省収集の、アメリカとカナダの大戦ポスターが貸し出されており、⁽¹¹⁾1917年に広島県物産陳列館で開催された「広告絵札展覧会」は、実質的に1916年に神戸高等商業学校で開催された「広告絵札展覧会」の巡回展であった。⁽¹²⁾また、この種の展覧会として最もよく知られている朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」の初回となる、1921年5月の大阪市庁舎会場には「所狭しと各室に展示したポスターは、ドイツの四百点を中心に、米国の百八十点、フランスの八十点、日本の二百点。色彩やデザインにそれぞれの国民性が現れていた。途中からはロシアのものを絵葉書で、さらに英国のポスターも追加した」⁽¹³⁾らしく、同展はその後、東京をはじめとする、当時の朝日新聞社が地方版を発行していた、外地を含む全国32カ所に巡回している。もっとも、各会場によって広さは異なり、会期に注目してみると、明らかに重なっている会場もあることから、巡回といっても全く同じ作品が各会場で見られたわけではなく、実際には会場規模に合わせていくつかのパッケージが同時に動いていたと思われる。しかも、朝日新聞社は自ら公開する前にコレクションの一部を、1918年10月に京都市立商品陳列所において開催された「広告意匠博覧会」に貸し出して⁽¹⁴⁾もいた。

このように、日本における大戦ポスターは、1910年代後半以降、展覧会形式で作品がしばしば公開されており、それによってその存在は、デザインや広告の関係者のみならず、広く一般市民にも知られるものとなった。ただし、それが実際に日本のグラフィック・デザインに影響を与え、後述する翻案作品を永く生み続けるためには、展覧会のような一過性の催事ではなく、図版をいつでも確認できる状況が担保される必要性があり、次節以降で述べる紙誌における作品紹介や、記念図録的な書籍の刊行が大きな意味を持っていた。

（2）刊行物における紹介

1914年6月28日のサラエボ事件を契機として火ぶたが切られた第一次世界大戦は、勝敗が決せぬまま長期化し、参戦国と戦地はヨーロッパ各国が同盟を結んだり、植民地化するなどして覇権を握っていた、アフリカやアジアの国や地域にまで拡大し、文字通り世界中を何らかの形で巻き込む大戦争となった。

表2：第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事

No.	題名	執筆者	掲載誌	巻号	出版社	発行年月	備考
1	「欧洲大乱と印刷界 (一)」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第8号	印刷世界社	1914年8月	
2	「欧洲大乱と印刷界 (二)」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第8号	印刷世界社	1914年8月	
3	「欧洲の大乱と我が印刷物」	永松国二	『日本印刷界』	第59号	日本印刷界社	1914年9月	
4	「三間隆次氏の消息」	署名なし	『日本印刷界』	第59号	日本印刷界社	1914年9月	
5	「戦争と米國印刷界」	署名なし(記者)	『印刷世界』	第8巻第11号	印刷世界社	1914年11月	
6	「時局の遷延と印刷界」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第12号	印刷世界社	1914年12月	
7	「欧洲印刷界の噂」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第12号	印刷世界社	1914年12月	
8	「外國雑事」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第12号	印刷世界社	1914年12月	
9	「米國石版界最新雑事」	署名なし	『印刷世界』	第8巻第12号	印刷世界社	1914年12月	
10	「三間隆次氏の帰朝」	署名なし	『日本印刷界』	第62号	日本印刷界社	1914年12月	
11	「洋行みやげ」	三間隆次	『日本印刷界』	第63号	日本印刷界社	1915年1月	
12	「戦争と印刷の関係」	那須技師	『日本印刷界』	第75号	日本印刷界社	1916年1月	
13	「戦争と圖案」	澤田誠一郎	『日本印刷界』	第75号	日本印刷界社	1916年1月	
14	「大戦ポスター 圖版 18点」	署名なし	『日本印刷界』	第78号	日本印刷界社	1916年4月	図版18点 うち5点は『Penrose's Annual 1916』 に掲載された「NATIONAL ADVERTISING IN POSTERS」から 転載している可能性大
15	「独逸の印刷業を如何にして征服すべきか」	矢野道也	『日本印刷界』	第79号	日本印刷界社	1916年5月	
16	「広告繪札蒐集に就て」	中川静	『学友会報』	第99号	神戸高等商業学校 学友会	1916年5月	No.1の展覧会関連記事
17	「「ポスター」に就いて」	支羊生	『学友会報』	第102号	神戸高等商業学校 学友会	1916年8月	No.1の展覧会関連記事
18	「広告繪札蒐集に就て」	中川静	『学友会報』	第104号	神戸高等商業学校 学友会	1916年10月	No.1の展覧会関連記事
19	「ポスター展覧会 東洋最初の試み」	筑紫生	『学友会報』	第105号	神戸高等商業学校 学友会	1916年11月	No.1の展覧会関連記事
20	「広告繪札展覧会に就て」	中川静	『学友会報』	第106号	神戸高等商業学校 学友会	1916年12月	No.1の展覧会関連記事
21	「軍事と印刷の将来」	日高謹爾	『印刷工芸』	第1巻第1号	東京印刷同業組合	1917年3月	
22	「米國參戰とポスター熱=繪ピラで愛國心を 煽り兵士の募集をなす=」	署名なし	『印刷世界』	第11巻第7号	印刷世界社	1917年7月	
23	「伊國の印刷物制限」	署名なし	『日本印刷界』	第97号	日本印刷界社	1917年11月	
24	「英國に於ける洋紙欠乏」	署名なし	『日本印刷界』	第97号	日本印刷界社	1917年11月	
25	「洋紙欠乏と英國の新聞雜誌」	署名なし	『日本印刷界』	第97号	日本印刷界社	1917年11月	
26	「米國募兵広告ピラ 4点」	署名なし	『日本印刷界』	第100号	日本印刷界社	1918年2月	図版4点
27	「月曜圖報」	署名なし	『大阪毎日新聞』		大阪毎日新聞社	1918年4月1日	図版1点
28	「米國の印刷材料市況と日本支那向輸出の 困難 米國カ会社より中西商店への近信」	署名なし	『印刷雜誌』	第1巻第1号	印刷雜誌社	1918年5月	
29	「戦争と印刷物」	署名なし	『日本印刷界』	第107号	日本印刷界社	1918年9月	
30	「広告意匠博覧会八面觀」	尾生光三郎	『京都』	第50号	京都商品陳列所	1918年10月	No.7の展覧会関連記事 『大阪毎日新聞』に掲載された記事 の転載
31	「我國の広告文を語る 広告博の「朝日」 出品」	署名なし	『京都』	第50号	京都商品陳列所	1918年10月	No.7の展覧会関連記事 『大阪朝日新聞』に掲載された記事 の転載
32	「米國政府ポスターに就て」	内海生	『京都』	第50号	京都商品陳列所	1918年10月	No.7の展覧会関連記事 『大阪朝日新聞』に掲載された記事 の転載
33	「米國の戦争気分=印刷材料商の募債広告 寄附=」	署名なし	『印刷雜誌』	第1巻第7号	印刷雜誌社	1918年11月	
34	「米國戦時ポスター 2点」	署名なし	『印刷雜誌』	第1巻第7号	印刷雜誌社	1918年11月	図版2点
35	「參戰後の米國に関する報告」	乗杉嘉寿	『時局に関する教育 特別輯』	第4号	文部省普通学務局	1918年	図版10点
36	「大戦に影響された印刷インキと材料」	矢野直也	『印刷雜誌』	第2巻第2号	印刷雜誌社	1919年2月	
37	「米國戦時ポスター展覧会」	署名なし	『都市公論』	第2巻第12号	都市研究会	1919年12月	図版2点
38	『米國戦時ポスター説明書』				都市研究会	1920年	No.13の展覧会関連記事 展示された99点分の作品の翻訳と 解説を収録
39	「繪びらと電車広告に関する新しい紹介」	署名なし	『商工彙報』	第35号	大阪商品陳列所	1920年1月	図版4点
40	「「日米」ポスターの比較と其所感」	署名なし	『日本印刷界』	第124号	日本印刷界社	1920年2月	No.13の展覧会関連記事
41	「戦時ポスター展を観る」	一記者	『日本印刷界』	第124号	日本印刷界社	1920年2月	No.13の展覧会関連記事
42	「世界大戦ポスター展覧会記事」		『大阪朝日新聞』 『東京朝日新聞』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年4月30日 ～7月1日 1921年5月21日 ～6月23日	No.17の展覧会関連記事
43	「独逸宣伝ポスター展覧会」		『読売新聞』		読売新聞社	1921年6月2～ 27日	No.18の展覧会関連記事
44	「ペ夫人の祖國ポスター観」	ペ夫人 (=アンナ・ ペルリーナ)	『日本印刷界』	第140号	日本印刷界社	1921年6月	No.17の展覧会関連記事
45	「國宝ポスター」	署名なし	『日本印刷界』	第140号	日本印刷界社	1921年6月	No.17の展覧会関連記事 1921年6月18日付の『東京朝日新聞』 に掲載された記事の転載
46	「ポスターに描かれた美人」	署名なし	『大阪毎日新聞』		大阪毎日新聞社	1921年6月	図版3点
47	「戦時ポスター展覧会」	署名なし	『京都』	第83号	京都市商品陳列館	1921年7月	No.17の展覧会関連記事
48	「ポスター展覧会印象記」	齋藤佳三	『日本印刷界』	第141号	日本印刷界社	1921年7月	No.17の展覧会関連記事 No.59と同じ 1921年6月22、23日付の『東京朝 日新聞』に掲載された記事の転載
49	「独逸ポスターの版画的価値」	織田一麿	『日本印刷界』	第141号	日本印刷界社	1921年7月	No.17の展覧会関連記事
50	「独逸ポスター時感」	渡邊素舟	『現代の圖案工 芸』	第87号	現代の圖案工芸社	1921年8月	No.18の展覧会関連記事
51	「独、奥、匈、瑞ポスター展覧会」	素 (=渡邊素舟)	『現代の圖案工 芸』	第87号	現代の圖案工芸社	1921年8月	No.18の展覧会関連記事
52	「ポスター芸術」	菅原教造	『中央美術』	第7巻第8号	日本美術学院	1921年8月	No.17の展覧会関連記事 図版28点

	題名	執筆者	掲載誌	巻号	出版社	発行年月	備考
53	「大戦ポスターの蒐集から展覧会を開くまで」	内海幽水	『中央美術』	第7巻第8号	日本美術学院	1921年8月	No.17の展覧会関連記事 No.58と同じ
54	「宣伝に関する予の研究」	河野恒吉	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事 No.63と内容が一部重なっている。1921年6月15日に広告主150名を招待して帝国ホテルで行われたポスター展にちなんだ講演会の内容を書き起こしたものである可能性が高い。
55	「ポスター概説」	内田魯庵	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
56	「刺戟としてのポスター」	菅原教造	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事 1921年6月15日に広告主150名を招待して帝国ホテルで行われたポスター展にちなんだ講演会の内容を書き起こしたものである可能性が高い。
57	「ポスター其他の広告媒体に関する史的観察」	中川静	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
58	「大戦と各國ポスター」	署名なし	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
59	「大戦ポスターの蒐集から展覧会を開くまで」	内海幽水	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事 No.52と同じ
60	「ポスター展覧会印象記」	齋藤佳三	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事 No.47と同じ 1921年6月22、23日付の『東京朝日新聞』に掲載された記事の転載
61	「米國の戦時ポスター」	渡邊誠吾	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
62	「戦時の巴里で見たポスター」	重徳泗水	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
63	「改選當時の英國のポスター」	杉村楚人冠	『大戦ポスター集』		大阪朝日新聞社 東京朝日新聞社	1921年9月	No.17の展覧会関連記事
64	「宣伝に関する研究の一斑」	河野恒吉	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事 No.53と内容が一部重なっている 『大戦ポスター集』から図版4点が転載
65	「ポスター雑感」	魯庵生 (=内田魯庵)	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事
66	「ポスターの生國日本」	松宮三郎	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事
67	「美術品としてのポスター」	山本鼎	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事
68	「大戦ポスターに現はれた米國の標語」	成澤玲川	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事
69	「私のポスター感」	久保田米齋	『国粹』	第1巻第10号	国粹出版	1921年10月	No.17の展覧会関連記事
70	「宣伝戦の一般形式および戦時宣伝戦の要領」	河野恒吉	『ポスター』	ポスターのきじ	高原会	1922年10月	図版は当時ドイツで発行されていたデザイン専門誌『Das Plakat』から転載した可能性大
71	「独逸宣戦時戦後のポスター」	守田文治	『ポスター』	ポスターのきじ	高原会	1922年10月	No.18の展覧会関連記事
72	「宣伝に関する雑感」	田中一良	『ポスター』	ポスターのきじ	高原会	1922年10月	
73	「日本のポスター界」	玉村善之助	『ポスター』	ポスターのきじ	高原会	1922年10月	
74	「ポスターと美術」	村雲毅一	『ポスター』	ポスターのきじ	高原会	1922年10月	
75	「歐洲大戦當時の列國ポスター紙上展」	署名なし	『読売新聞』		読売新聞社	1937年10月5日～11月9日	全30回、各回図版あり
76	「家庭と学芸 祖國は求める世界大戦當時のポスター集」	署名なし	『大阪毎日新聞』		大阪毎日新聞社	1937年11月7～17日	全10回、各回図版あり
77	「歐洲大戦と列國の貯蓄運動」	国民貯蓄奨励局	『週報』	第87号	内閣情報局	1938年6月15日	図版2点
78	「ドイツを見よ」	署名なし	『満洲日日新聞』		満洲日日新聞社	1938年8月24～28日	全5回、各回図版あり
79	「歐洲戦を回顧して」	署名なし	『広告界』	第15巻第9号	誠文堂新光社	1938年9月	図版34点
80	「児童が作った大戦ポスター」	署名なし	『東京朝日新聞』		東京朝日新聞社	1938年12月11日	図版2点
81	「戦争と食料」	署名なし	『写真週報』	第45号	内閣情報局	1938年12月21日	図版5点
82	「歐洲大戦と食糧政策」	農林省	『週報』	第149号	内閣情報局	1939年8月23日	図版1点
83	「第二次歐洲大戦問答」	署名なし	『東京朝日新聞』		東京朝日新聞社	1939年9月6～16日	全10回、各回図版あり No.20の展覧会関連記事
84	「大戦ポスター展」	署名なし	『広告界』	第16巻第11号	誠文堂新光社	1939年11月	図版27点、No.20の展覧会関連記事
85	「歐洲戦乱はいつ熄むか」	高石眞五郎	『国民精神総動員』	第44号	国民精神総動員中央聯盟	1940年3月1日	図版1点
86	「宣伝戦」	署名なし	『広告界』	第17巻第9号	誠文堂新光社	1940年9月	イギリスの『アート・アンド・インダストリー』第169号に掲載された記事の転載 図版6点

執筆者の職業、肩書

永松國二……松坂屋伊藤呉服店用度課長
三間隆次……三間印刷所社主
那須技師……印刷局技師
澤田誠一郎……工芸図案家、農商務省海外実業練習生として図案研究のために米國留学経験あり
矢野道也……印刷局技師、印刷工学者
中川静……神戸高等商業学校教授、広告研究の第一人者
文半生……神戸高等商業学校の卒業生で中川静の教え子
筑業生……神戸高等商業学校の学生
日高謙爾……海軍中佐
尾生光三郎……京都高等工芸学校教授
内海幽水……大阪朝日新聞学芸部員
兼杉嘉寿……文部省監学官
べ夫人……ユダヤ系ドイツ人の心理学者アンナ・ベルリナー。当時は日本に滞在中であった
齋藤佳三……東京美術学校講師、図案家
織田一磨……洋画家兼版画家
渡邊素舟……デザイン評論家、『現代の図案』編集長、後に多摩帝國美術学校教授

菅原教造……朝日新聞記者、文学士、後に服飾研究家
河野恒吉……陸軍少佐、後に大阪朝日新聞社軍事顧問
内田魯庵……丸善顧問
渡邊誠吾……朝日新聞記者
重徳泗水……朝日新聞記者
杉村楚人冠……朝日新聞記者
松宮三郎……三越呉服店宣伝部長
山本鼎……洋画家兼版画家
成澤玲川……朝日新聞記者、フォトジャーナリストの先駆者
久保田米齋……三越呉服店図案部員
守田文治……1915年末に渡欧した新婦朝者、明治末より二六新聞記者として活躍
田中一良……高原会会員
玉村善之助……日本画家、高原会会員
村雲毅一……高原会会員
高石眞五郎……大阪毎日新聞社会長兼主筆

日本は日英同盟の関係から、8月にドイツ帝国に対して宣戦布告することで第一次世界大戦に参戦し、この戦争によって300名の戦死者を出している⁽¹⁵⁾。しかし、この人数は先の日清・日露戦争とは比べ物にならないほど少数であり、国土が戦場になる危険性がほとんどなかったことも相まって、一般市民の危機意識は当初それほど高くなかった。その上、日本国内はこの戦争によって好景気に沸き、終戦後は戦勝国の一つとしてドイツが持っていた中国における権益の一部を継承できたことから、当時の日本国民は、どちらかといえば大戦景気を謳歌することはあっても、刻々と変化する戦局とそれに起因する悪影響について、憂慮する気分にはなりづらかった。

ところが、これとは対照的な反応を示したのが日本の印刷業界であり、当時の印刷業界誌を総覧すると、表2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」に示したように、1914年8月発行の『印刷世界』第8巻第8号に、早くも「欧洲大乱と印刷界(一)」と「欧洲大乱と印刷界(二)」という2本の記事が掲載されており、その内容は日本で印刷に用いられる輸入原材料の高騰と、不足傾向が見られはじめたことについて説くものであった。

第一次世界大戦に関する論評が、早い段階で印刷業界誌に掲載された背景には、当時の斯界が品質の優位性を理由として、すでに国産化が始まっていた印刷関連の原材料を、ヨーロッパから大量に輸入していたことが大きい。このため、同地が戦場と化すことによって製品の製造や輸出が滞ったり、戦地の拡大によって船舶の航行や手配、通関手続きに支障が生じたり、製品価格にも影響を及ぼすような海上輸送保険が高騰する事態⁽¹⁶⁾に対して、強い危機意識を抱いていたのである。

もっとも、1910年代半ばの日本の印刷業界、特にポスターに代表される多色平版印刷物を主力商品とする平版印刷界が、第一次世界大戦の動向に注目していた理由には、平版印刷においてもオフセット輪転印刷機の導入が進み、活版印刷と同様に高速化や大量化への道が開けつつあったことや、欧米で画期的な製版方法として、写真製版術が発明されたことを受け、日本もこれらの世界的潮流に、どのように対応するか⁽¹⁷⁾の決断を迫られていたという、技術的な側面が最も強かった。ただし、現在判明している大戦ポスターの最初の一般公開となる、1916年10月の神戸高等商業学校における「広告絵札展覧会」よりも、図版としての紹介が、後述するように半年早いこと、しかもその掲載された媒体が、またもや印刷業界誌であったことは、斯界の大戦ポスターに対する関心が、当初から相当高かったことを示しており、この点については注意を要すると思われる。

現在確認されている図版としての大戦ポスターの紹介は、表2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」に示したように、1916年4月に発行された『日本印刷界』第78号に遡り、ここでは18点の大戦ポスターが取り上げられた。その紹介方法は、記事中の挿図という形式ではなく、2～13ページに掲載された全く別の記事の上段に、《英國政府募兵ポスター九種》【図1】、《英國政府募債ポスター九種》【図2】といった、簡単なキャプションを伴って、図版だけが掲載されたに過ぎず、従って、これを目にした当時の読者が、これらについてどれだけ理解できたかは疑問である。ただし、日本のデザイン界は開国以来、常に欧米の作品を手本として発達してきた経緯があり、ポスターを筆頭とするグラフィック・デザインの製作に関わる人々は、翻案とするにふさわしい作品を探したり、それらに関する情報収集に余念がなかった。このため、当時の商業雑誌や広告や印刷の専門誌には、彼らの需要を満たすべく、解説なしで国内外の秀作を紹介されることはよくあり、それはそれで意味があった。つまり、『日本印刷界』第78号における大戦ポスターの図版は、最新のイギリスにおける

ポスターとして掲載されるだけでも、関係者には十分役に立ったし、印刷業界誌に以前から大戦関係の記事が掲載されていたことを考慮するならば、大戦ポスターの図版を見た関係者の中には「これが例のポスターか」と思った人物もいたであろう。



図1 《英國政府募兵ポスター九種》
『日本印刷界』第78号 1916年4月

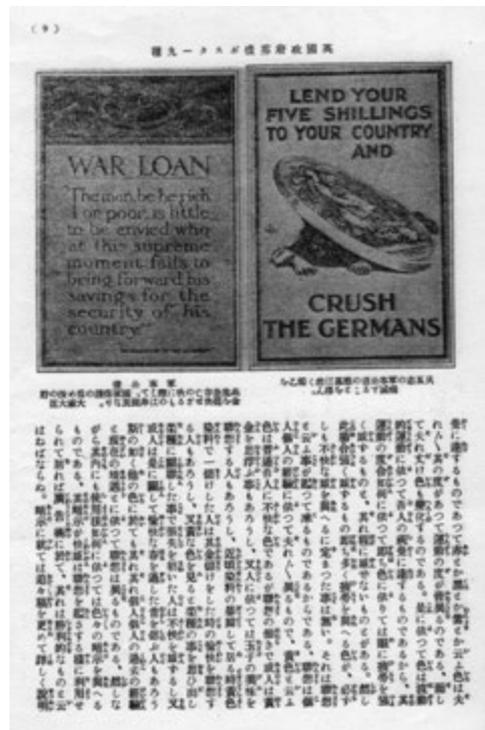


図2 《英國政府募兵ポスター九種》
『日本印刷界』第78号 1916年4月

ちなみに、《英國政府募兵ポスター九種》【図1】として紹介された作品のうち5点は、図版のレイアウトなどから察するに、イギリスで刊行され、当時の日本でも印刷関係者の間で広く読まれていた印刷年鑑『Penrose's Annual 1916』に収録された、WALTER J. AVERYによる「NATIONAL ADVERTISING IN POSTERS」の挿図15点【図3】の中から転載されたものと思われる。また、《英國政府募債ポスター九種》【図2】として紹介された作品に関しては、最後に「天王寺公園貿易共進會美術館にて撮影、原畫色刷り。」と記されており、これが事実であるならば、遅くとも1916年の春以前に、天王寺公園内にあった勸業館においては、大戦ポスターの実物が収蔵されていたことになる。つまり、今日確認できている最初の「大戦ポスター展」としては、1916年10月に神戸高等商業学校において開催された「広告絵札展覧會」となるものの、作品を目にする機会の前提となる大戦ポスターの日本への物理的流入は、もっと早かったことになり、これはこれで興味深い。

なお、表2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」を改めて概観してみると、当然のことではあるものの、各種「大戦ポスター展」の開催以降の記事は、図版を伴った記事が全般的に多い。そして、後述する朝日新聞社が全国巡回させた「世界大戦ポスター展」に関しては、主催者がマスコミであり、開催地が同社の地方版の発行地域と重なっていたことから、ほとんどの場合、記事には作品図版や会場写真が添えられ、ときには地元の名士や識者の感想や意見を含めた充実した報道がなされた。



図3 「NATIONAL ADVERTISING IN POSTERS」 WALTER J. AVERY
『Penrose's Annual 1916』1916年

ただしその一方、論説は新聞から雑誌へ、雑誌から書籍へ再録・転載されることも多く、全てが書きおろしではなかった。それでも、1945年8月の終戦までに、確認されているだけでも延べ86本の記事が掲載され、そのほとんどが第一次世界大戦終結の余韻が日本国内で残っていた、1922年までに集中していることから、大戦ポスターに対する関心の高さが窺われ、興味深い限りである。

(3) 関連書籍の編集発行とその流布

大戦ポスターに関しては、その公開とほぼ同時期の1921年に、多くの作品図版を伴った『大戦ポスター集』【図4】と『ポスター』【図5】が編集発行された。詳しくは後述するものの、前者は朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」にちなんで編集発行され、同社によって「大戦ポスター絵葉書」【図6】と共に大々的に広告・販売されたことから、当時から後者よりもその存在がよく知られていた。

さて、展示作品を網羅した図録や絵葉書を筆頭とする関連商品が、展覧会に際して製作・販売されることは、現在では至極当然のことである。しかし、展覧会の鑑賞人口が少なかった戦前期の日本においては、これらが製作・販売されることの方が稀であり、特に編集に時間と労力を要する図録は、大規模な博覧会や共進会の終了後に、関係者に贈呈する記録集として編まれることはあっても、一般向けに販売することを前提に編集発行されることはほとんどなかった。

ところが、「世界大戦ポスター展」に関しては、4会場目となる神戸湊川勸業館での会期中から、「大戦ポスター絵葉書」が6枚組で2種類、各25銭で発売され、優秀作170点を掲載した『大戦ポスター集』については、7月11日付の『大阪朝日新聞』朝刊1面に「大戦ポスター集豫約募集」【図7】の社告が大々的に出されたほか、各展覧会場内や各地の新聞販売店でも予約受付が開始され、7月中の

予約者には3円50銭で、以降は定価の4円50銭で販売された。

「四六二倍判、洋装美本三色版及フォトグラビュア版等百七十種、本文百五十頁総頁数三百六十頁⁽²⁰⁾」と謳われた『大戦ポスター集』は、文字通り図版の一部がカラー印刷され、かつポスター上に書かれた外国語が翻訳され、表2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」にまとめたように、巻末にはポスターに詳しい識者や、収集や展覧会に携わった社員による10本の関係論文が掲載された、当時としては視覚的にも読み物としても充実した内容を誇る豪華な書籍であった。もちろん、同書の4

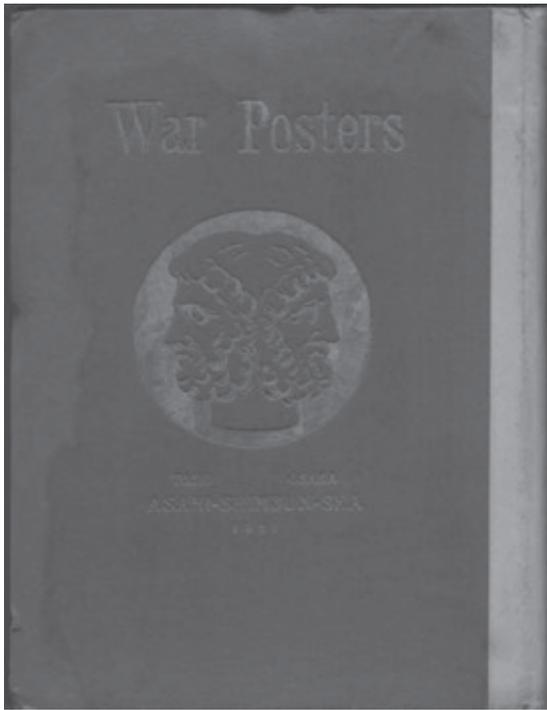


図4 『大戦ポスター集』朝日新聞社
1921年 個人蔵



図5 『ポスター上』高原会
1922年



図6 「大戦ポスター絵葉書」朝日新聞社
1921年 個人蔵



図7 「大戦ポスター集豫約募集」
1921年7月11日『大阪朝日新聞』朝刊1面

円 50 銭という定価は、必ずしも安くはなかった。しかし、図版と日本語による解説が充実している特徴は、政治や社会に関心を寄せるインテリ層の知識欲を満たすと同時に、広告やそのデザインに携わる人物にとっては、最新かつ格好の参考書と映り、個人で買い求めた人が相当数いたものと思われる。なぜなら、現在でも同書は古書店の目録などでしばしば目にするが、これらは基本的に個人の旧蔵品だからである。

なお、同書が刊行された当時から開館している公共図書館や大学図書館の蔵書を確認してみると、その多くに『大戦ポスター集』が「購求」という形で所蔵されていることも忘れてはならない。なぜなら、無料で閲覧・借用できる図書館の蔵書となったことで、『大戦ポスター集』は永く、そして広く一般市民が参照できる状況を得たからである。そしてこのことは、次章で紹介する大戦ポスターを翻案とした作品の誕生を促す一因にもなった。

一方、高原会によって編集発行された『ポスター』【図 5】は、読売新聞社を主催者、銀座の星製菓樓上を会場として、1921 年 6 月 18～26 日に開催された「独逸宣伝ポスター展覧会」にちなんで編まれたものであり、菊二倍版の 3 冊構成になって世に出た。ただし、ドイツの大戦ポスターを筆頭に、ヨーロッパの商業ポスターやそれ以外の広告物など、152 点の図版が掲載された「ポスター上」と「ポスター下」は、同年 12 月に 9 円で発売されたものの、守田文治の講演内容を含む 5 本の論文と、図版のキャプションの翻訳文が収録された「ぼすたーのきじ」は、翌年 10 月ようやく刊行されるに至った。

『ポスター』【図 5】を『大戦ポスター集』【図 4】と比較すると、判型と収録された図版や論文の数の点で、前者は若干見劣りする。ただし、同書においては掲載された 152 点のうち、約 130 点がカラー印刷されており、図録として見た場合はこちらの方が勝っているともいえる。けれども、展覧会最終日の 6 月 26 日の『読売新聞』朝刊 1 面に、書籍発行の計画が大々的に掲げられながら、実際の発売がそれから約半年後の年末にずれ込み、しかも「着色版然もその多くが共通色を持たないものを製版印刷するのに多大な努力と時間を要」したためとはいえ、このときには図版を収録した「ポスター上」と「ポスター下」しか発売されず、論文と図版のキャプションの翻訳文が収録された「ぼすたーのきじ」を得るには、さらに 10 カ月待たなければならぬとなると、大戦ポスターに少々関心を持つ程度の市民にとっての『ポスター』【図 5】は、価格が『大戦ポスター集』【図 4】の 2 倍であることも含め、手が出しづらかったと思われる。そして実際、同書を現在所蔵している機関が非常に少なく、かつ古書市場においてもほとんど見かけないことを考慮すると、同書は発行が『大戦ポスター集』【図 4】の後塵を拝したために、おそらく関係者が期待したほど売れず、売れる見込みが立たないことを理由として、発行部数自体がそもそも少なかったとも考えられる。

いずれにしても、こうした事情から『ポスター』【図 5】は、言及される割には実物を見る機会に恵まれない、「幻の書籍」となっており、大戦ポスターの翻案化に際しては、『大戦ポスター集』【図 4】に掲載された作品の方が、より多く採用されている傾向が強い。ただし、詳しくは後述するものの、いくつかの作品に関しては、双方に作品が掲載されていることから、図案家たちがどちらの書籍を参照し、翻案化したかを厳密に特定することはできない。その上、前者にしか掲載されていない作品が、翻案化された例も見つかっており、デザインや広告を生業とする者の中には、2 種とも買い求めて手元に置いていた人物が、それなりに存在したと思われる。

Ⅲ 大戦ポスターの受容

(1) 新たな手本としての大戦ポスター

日本のデザイン界は開国以来、常に外国作品を手本として発達してきており、欧米の名画やポスターを翻案として製作された作品は、1650年のベラスケスによる《ウェヌスの化粧》【図8】と、1900年頃の《天狗煙草》【図9】、1899年のアルフォンス・ミュシャによる《羽根》【図10】と、石川寅治による1908年10月発行の『東洋婦人画報』第17号の表紙【図11】といった具合に、古くから存在した。もっとも、外国作品を翻案とする行為は、近代化を急いだ明治時代に限定されたものではなく、実際には戦前期全般を通して見られ、その範囲はポスター、雑誌表紙、新聞広告、挿絵など多岐にわたった。

いうまでもなく、こうした行為は現在では著作権侵害として見なされ、作品も作家も批判にさらされがちである。しかし、当時の日本においては、著作権という概念が普及していなかったことに加え、外国作品に触れられる機会や人物が限られていたことから、それらを翻案化する行為は、「研究している証拠」として推奨されることはあっても、卑下されるものではなかった。

さて、こうした日本の社会状況下における、大戦ポスターに対する受け止めであるが、広告やデザインに携わる人々にとっては、全く新しく刺激的な学ぶべき対象と見なされたようである。なぜなら、そこには従来の日本のデザイン界で支配的であった、アール・ヌーヴォーとは一線を画す、ドイツやアメリカの力強い作品が多数含まれていたからである。そしてその結果、大戦ポスターを翻案とした作品は、公開からすぐさま出現した。

現在確認されている、大戦ポスターを翻案とした最も古い作品は、1919年6月28日の『大阪朝日新聞 神戸附録』に掲載された、《岡部印刷事務所の新聞広告》【図12】である。同社は神戸を本拠地とする地方の印刷会社ではあったものの、ポスター印刷で名を馳せた東京の市田印刷株式会社⁽²³⁾に図案を提供したり、戦前期に製作された阪神間の企業のパンフレットや絵葉書を多数手がけており、そこから察するに、デザインに関しては日々相当に研究していたものと思われる。

岡部印刷事務所が新聞広告を製作する際に翻案としたのは、指さしポーズが印象的なアンクル・サムを主題とした、ジェームス・モンゴメリー・フラッグによる1917年の《アメリカ募兵ポスター》【図13】であり、この作品は『大戦ポスター集』【図4】に48番として紹介されている。しかし、同書の刊行は1921年9月であり、『大阪朝日新聞 神戸附録』への広告掲載が2年以上早いことを考えれば、同書を参考にしていないことは明らかである。では、同社はどこからこの図版を得たのであろうか。

《岡部印刷事務所の新聞広告》【図12】は、フラッグの《アメリカ募兵ポスター》【図13】を描き起こして広告に用いたのではなく、明らかに実物のポスターを写真撮影した後に、シルクハットの星を社章に改変するレタッチを施すことで作品化している。つまり、実物のポスター、もしくはそれを撮影した鮮明な写真が入手できなければ、この広告図案を製作することは不可能となる。そこで改めて表1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」を見てみると、新聞広告が掲載された1919年6月以前にも、関西では「大戦ポスター展」がいくつか開催されており、中でも1919年2月1～27日に大阪府立商品陳列所において開催された「亜米利加美羅絵展覧会」には、三輪善太郎が



図8 《ヴェヌスの化粧》ペラスケス 1650年
諸川春樹監修『西洋絵画の主題物語(2) 神話編』
美術出版社 1997年



図9 《天狗煙草》1900年頃
たばこと塩の博物館蔵



図10 《羽根》アルフォンス・ミュシャ 1899年
『ミュシャ財団秘蔵 ミュシャ展』(展覧会図録)
高松市美術館他、2004年

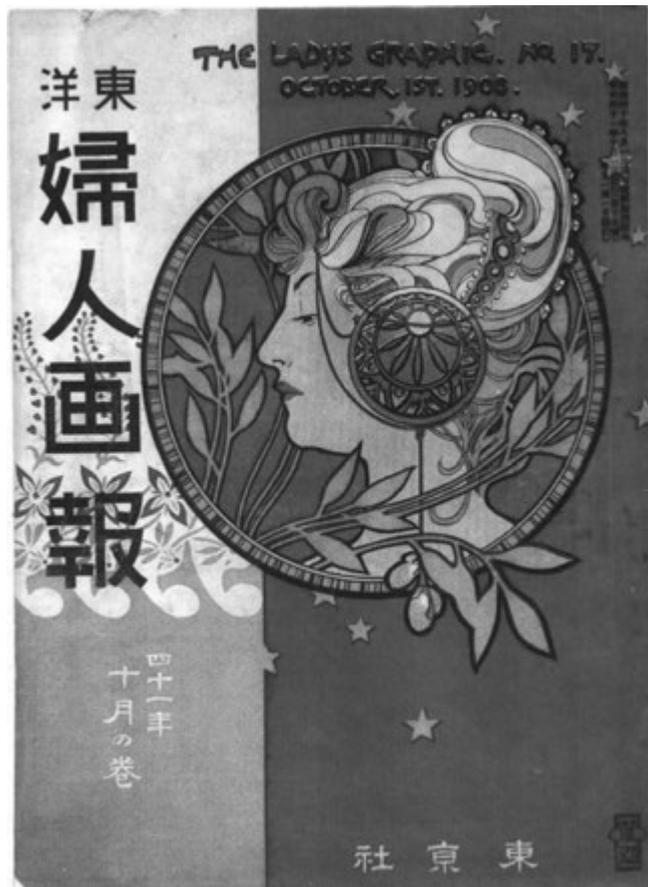


図11 『東洋婦人画報』第17号の表紙 石川寅治
1909年10月



図12 《岡部印刷事務所の新聞広告》
1919年6月28日
『大阪朝日新聞 神戸附録』朝刊



図13 《アメリカ募兵ポスター》
ジェームス・モンゴメリー・フラッグ 1917年
朝日新聞社『大戦ポスター集』1921年



図14 《アイフの新聞広告》
1924年4月11日
『大阪朝日新聞』朝刊5面

収集した米国のポスター 700 点と、大阪府立商品陳列所が収集した 200 点の海外ポスターが展示されていたことから、同展においてフラッグの作品が展示されていた可能性は高い。もっとも、同展に関しては出品目録がないことから、フラッグの作品が展示されていたことや、この機会に岡部印刷事務所が写真を入手したであろうことは推測の域を出ない。しかし、戦前期の日本においては、広告図案を専門的に手がける図案社＝デザイン会社や、個人で仕事を請け負う自営の図案家＝グラフィック・デザイナーがそれほど多くはなく、印刷物に用いられる図案は、企画立案から印刷物に仕上げるまでの全ての工程を、印刷会社が窓口となって請け負うことが多かった。このため、岡部印刷事務所のように絵看板（＝ポスター）や絵葉書を営業科目として掲げる印刷会社には、外部からの注文に応えるべく、必ず専門職として図案家が勤務し、彼らは常に海外の新しいデザインの動向に注意を払い、参考資料の収集に関しては、社を挙げて積極的であった。

こうしたことを考慮すると、岡部印刷事務所が何らかの方法でフラッグの《アメリカ募兵ポスター》【図 13】の実物、ないしは写真を入手し、それを翻案として自社広告を起こしたことは、十分に考えられる。なお、このポスターが選ばれた理由には、指差しポーズが印象的であることだけではなく、実際のポスターの背景が無地であることから、アングル・サムの図像だけを抜き出し、加工することが容易であったこと、また、新聞における印刷水準を考慮した際にも、この作品は濃淡がはっきりしており、そのまま写真として利用しても再現性が高いことが大いに関係していたものと思われる。

ちなみに、フラッグの《アメリカ募兵ポスター》【図 13】は、写真としてではなく、アングル・サムが銅版画風に描き起こされる形で、1924 年 4 月 11 日の『大阪朝日新聞』朝刊 5 面に《アイフの新聞広告》【図 14】としても採用されている。ただし、この広告は「世界大戦ポスター展」の開催後だったことや、一面広告であったことから、図と文字の配置や「胃腸」と「アイフで治されよ」の文字が赤色で印刷されている点に、翻案としたフラッグの《アメリカ募兵ポスター》【図 13】との近似性がより強く感じられ、新聞広告でありながら、大きさの点からもポスター的な存在感を誇っている。

このように、大戦ポスターは紹介直後から新たなデザインとして関係者に認知され、翻案とされてきた。しかし、それが多用化されるようになるのは、1921 年 9 月に朝日新聞社が『大戦ポスター集』【図 4】を刊行して以降のことであり、直後の例としては 1921 年 10 月 27 日付の『大阪朝日新聞 神戸附録』に掲載された《片山洋服店の新聞広告》【図 15】が挙げられる。これは『大戦ポスター集』に 3 番の作品としてカラーで紹介され、かつ絵葉書にもなった《イギリス募兵ポスター》【図 16】を翻案としている。ただし、《片山洋服店の新聞広告》【図 15】は《岡部印刷事務所の新聞広告》【図 12】のように、作品写真を直接的に使用したのではなく、《アイフの新聞広告》【図 14】のように基本的な構図を描き起こした上で、チョッキを筆頭に部分的に修正を加えることで、最終的な新聞広告としている。この背景には、当時の新聞紙面における写真や図版は再現性が低く、同じデザインを使用する場合も、元の図像を写真撮影して利用するよりも、新聞広告用に基本的な構図を改めて描き起こしたり、必要に応じて大きさや形を変更する方が一般的であったことが関係している。事実、『大戦ポスター集』に 155 番として掲載されている 1919 年のヴィクトール・アルナウトの《ドイツ戦時ポスター》【図 17】を翻案とした、1922 年 11 月 19 日の『大阪毎日新聞』朝刊 2 面に掲載されている《ライト体温計の新聞広告》【図 18】のように、必要な部分を一部切り取る翻案例は、当時の紙面を確認していくと、大小含めさまざまなものが確認できる。ちなみに、《ドイツ戦時ポスター》【図

17】は『ポスター』【図5】には、55番としてカラーで掲載されている。

なお、大戦ポスターは新聞広告のみならず、他の媒体において利用されることもあり、1922年頃とされている《大同生命保険株式会社の絵葉書》【図19】は、『大戦ポスター集』【図4】に96番として掲載された1918年のハーバート・パウスによる《アメリカ戦時債券ポスター》【図20】を翻案としたものであり、1923年の《内務省のポスター》【図21】は、同書に33番として紹介された1915年の《イギリス戦時体制強化ポスター》【図22】を翻案としたものである。ただし、大戦ポスターを翻案化した作品は、当時の日本における広告媒体の主流が新聞であったこと、及び1920年代初頭の日本においては、ポスター製作に写真製版術を用いることが十分に普及しておらず、ポスターが比較的高価な広告方法として存在し、その依頼主が大企業に限られていたことから、この時代まではポスターとしてよりも、新聞広告として存在することの方が圧倒的に多い。



図15 《片山洋服店の新聞広告》
1921年10月27日『大阪朝日新聞 神戸附録』朝刊



図16 《イギリス募兵ポスター》
朝日新聞『大戦ポスター集』1921年



図17 《ドイツ戦時ポスター》
 ヴィクトール・アルナウト 1919年
 朝日新聞社『大戦ポスター集』1921年



図18 《ライト体温計の新聞広告》
 1922年11月19日『大阪毎日新聞』朝刊2面



図19 《大同生命保険株式会社の絵葉書》
 1922年頃 個人蔵



図20 《アメリカ戦時債券ポスター》
 ハーバート・パウス 1920年
 朝日新聞社『大戦ポスター集』1921年



図 21 《内務省のポスター》
1923年 昭和館蔵

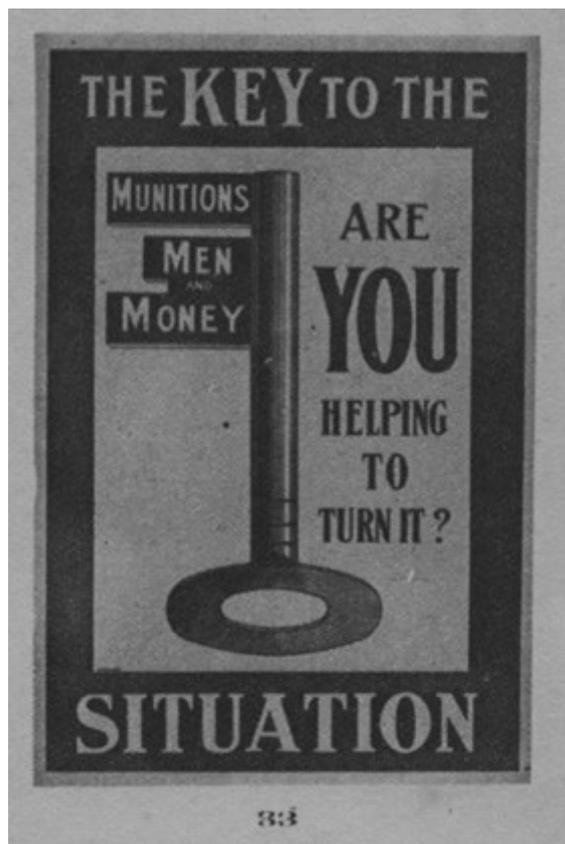


図 22 《イギリス戦時体制強化ポスター》1915年
朝日新聞社『大戦ポスター集』1921年

(2) 翻案化の実態とその特徴

これまで見てきたように、大戦ポスターは度重なる公開と『大戦ポスター集』の刊行によって、日本においてはその存在が広く知られ、1910年代末以降は、広告図案を作成する際の格好の参考作品として大いに活用されたが、その特徴を改めてまとめると以下ようになる。

第一に挙げられるのは、大戦ポスターを翻案とする作品の登場が、比較的早かった点である。前節で紹介したように、現在確認できる最も古い翻案作例は、1919年6月28日付の『大阪朝日新聞 神戸附録』に掲載された《岡部印刷事務所の新聞広告》【図12】に遡る。もっとも、この年月に関しては、すでに大戦の勝敗が決した後であることや、日本では1916年10月から大戦ポスターを展示する展覧会が開催され、紙誌に図版だけが紹介された例も同年4月に遡れることから、遅いと捉えることも可能である。しかし、表1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」で示した20種のうち、記念図録的なものが製作されたのは、1921年に朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」と、読売新聞社が主催した「独逸宣伝ポスター展覧会」だけであり、紙誌における作品図版の紹介が断片的で、かつ印刷の質が低かったことや、当時は写真を撮影したり、その原版を入手することが容易でなかったことを考慮すると、『大戦ポスター集』【図4】や『ポスター』【図5】の刊行よりも2年も前に翻案作品が登場していたことは、注目すべき事項であり、素早い対応として評価すべきと思われる。

第二に挙げられるのは、大戦ポスターの活用方法がポスターに限らず、より製作機会や部数が多く、結果的に人の目に触れる機会を獲得しやすい、新聞広告や絵葉書などに写された点であり、媒体間に

時差があったことも見逃せない事実である。前節でも触れたように、戦前期の日本における広告媒体の主流は新聞であり、1920年代半ばまでのポスターは、比較的高価な広告方法として存在していた。要するに、大戦ポスターが日本製ポスターに翻案化されるようになるためには、日本でポスター製作に写真製版術が実用化され、それがある程度浸透することによってポスターの製作費が下がり、誰もが手の出せる広告方法とならなければならず、それが国内で実現したのは1920年代半ばであった⁽²⁴⁾。このため、大戦ポスターの翻案化は、広告媒体によってどうしても時差が生じ、ポスターが最も遅くなったのである。

第三に挙げられるのは、翻案化される作品に偏りがあった点である。大戦ポスターに対する評価は、個々の作品や作家によって異なるだけではなく、実はその製作国がヨーロッパ諸国かアメリカかによって総体的に評価が分かれていた。例えば、文学士の菅原教造は「刺激としてのポスター」の中で、ヨーロッパの大戦ポスターに対しては、「皆ポスター藝術として永久の価値を有するものとされて居る⁽²⁵⁾」と賛辞を贈る一方、アメリカの大戦ポスターに対しては「亜米利加は藝術の低能國で、取り立てて言ふほどの作品もありません。」⁽²⁶⁾と切り捨て、東京美術学校講師の齊藤佳三は、「世界大戦ポスター展」を鑑賞した感想として「英、佛、米、日、獨の内で、何んと云っても最も秀れて居たのは獨逸のポスター⁽²⁷⁾であった。」と語っている。

菅原の評論には、ドイツの大戦ポスターを高く評価したいがために、必要以上にアメリカの大戦ポスターを見下す傾向が見られ、齊藤のドイツ最良もよく知られていたことから、両者の見解には中立公正ではない面もある。しかし、ヨーロッパの作品や作家に対する好意的な論調や、それらに対してより多くの文章を寄せる傾向は、菅原や齊藤の論説が収録されている『大戦ポスター集』を含め、当時発表されたもの全体に通じる傾向であり、必ずしも彼らが特異だったわけではなかった。事実、1921年に大々的な「世界大戦ポスター展」を主催した朝日新聞社においても、アメリカの大戦ポスターに関しては、アメリカ特派員として現地に滞在し、苦勞しながらその収集に当たった渡邊誠吾に対して「當時朝日新聞の編集長だったT氏は、渡邊君のポスター蒐集の趣意を理解しないで『何だツマラヌ、ピラ畫なんぞを蒐めて何にするか』と折返し電報で渡邊君を叱責した⁽²⁸⁾」らしく、同社としても、当初はアメリカの大戦ポスターについては、作品としてもその収集行為に対しても、無駄なことと認識していたようである。そしてだからこそ、朝日新聞社は渡邊が収集した大戦ポスターを、自ら最初に公開する榮譽を得ることなく、1918年10月に京都市立商品陳列所において開催された「広告意匠博覧会」⁽²⁹⁾に、やすやすと貸し出せたのである。

ちなみに、同社においてアメリカの大戦ポスターに対する評価が転換した契機は「和蘭のナイホッフ書店に蒐集した戦時中の新聞雑誌約五十種、七百冊が價格二萬円で賣物に出たので、村山本社社長が京大原勝郎博士の手を煩はして早速同書店に交渉して全部購入し之を京都帝國大學に寄附した（中略）右の新聞と同時に到着した又と得難い貴重な資料である、其は獨逸政府並に各種公共團の発行のポスターで大小合わせて百十種、五千数百枚⁽³⁰⁾」とあるように、オランダの書店から購入した新聞雑誌の中に、たまたまドイツの大戦ポスターが含まれ、それら「獨逸の戦時ポスターは分量実質共に米國のを遙に凌駕し廣告研究者は勿論政治家、軍事専門家、歴史家、經濟學者、社会問題の研究科等に取ては稀代の重宝であり他に容易に求め得ない研究参考の資料たるべき性質のものである⁽³¹⁾」ことから、「本社は此等のポスターを至急に整理した上廣く社会に公開し各方面の識者の参考に供したい⁽³²⁾」と思った

ことに因る。要するに、ドイツの大戦ポスターに対しては、朝日新聞社もすぐさまその価値を認めたものの、アメリカの大戦ポスターについては、前者と比較検証するための「引き立て役」として、それらが利用できることがわかった、1921年になって初めてその価値に気づいたのであり、ここからは同社にとっても、ドイツ製とアメリカ製では前者を尊ぶ考えが強かったことが窺われる。

では、アメリカの大戦ポスターに対してどのような評価がなされたかであるが、神戸高等商業学校教授の中川静は、大阪朝日新聞社が広告主を招待し、1921年5月に大阪の中之島公会堂で行った講演会の席上で「米國のポスターに超したるポスターは他に無いのである。(中略)米國のポスターが各國のものに比して優れて居ると云ふ事は、是は無論疑ひのない事と信じます。」と語っており、「世界大戦ポスター展」に展示された作品全体に対して論評した「大戦と各國のポスター」においても「米國は広告の本場である。従ってポスターの價値を最もよく認識してゐる國であつた。(中略)米國のポスターは印刷からいっても出来栄からいっても、華やかであり立派であることにかけては大戦各國のポスターの中に第一位を占むるものである上、発行の部数からいっても矢張第一等に位してゐよう。(中略)米國は廣告術の發達した國である。ポスターの本場である。ポスターを研究するには米國を措いて他にはない⁽³⁴⁾」と記している。ただし、後者の文中には「米國の官業ポスターも、俄然戦争開始と同時に大改良され、非常な活気をもち、盛んに発行され、圖案意匠が舊來のそれとは全く面目を一新し、獨逸のポスターを除くと、大戦のポスター中では他國を凌いで優秀な傑作品を澤山に製作することになった。」との一文もあり、アメリカの大戦ポスターを高評価した中川の中にも、それよりもドイツの作品を上位とする考えがあったことは確かである。

このように、全般的にアメリカの作品よりも、ドイツを筆頭とするヨーロッパの作品に対して高い評価を与える傾向が見られた理由は、大戦ポスターに対して意見を表明した識者の多くが、美術に造詣が深い人物であり、大戦ポスターを広告宣伝物としてよりも、芸術作品と見なしていたこと、及びその聖地としてヨーロッパに強い親近感や憧憬の念を抱いていたことが深く関係している。

日本におけるポスターの歴史は、19世紀後半に欧米から商品と共に、その広告宣伝物として物理的に流入したことによって始まる。しかし、1890年代に入ると、美術関係者の海外留学や万国博覧会への視察が盛んになり、彼らの中には現地で目にした多色石版術によるポスターに強く心を引かれ、帰国に際してそれらを持ち帰ったり、自らの展覧会で紹介することに積極的な姿勢を示す人物が現れた。事実、1900年9月、洋画団体である白馬会は、日本における「ポスター展」の嚆矢の例として、東京・上野で開催された「第5回白馬会展覧会」に、ミュシャの《トスカ》とシュヴァーベの《第1回薔薇十字会展》のポスターを展示し、以降、同会では続く翌年と翌々年の展覧会にも、数十点の海外ポスターを展示している⁽³⁷⁾。

白馬会が自らの展覧会に海外のポスターを展示した理由は、彼らが滞在していた19世紀末のヨーロッパにおいては、専門誌が創刊され、展覧会が開催されるほど、熱狂的なポスター・ブームが起こり、ポスターが文字通り「新しい芸術」として見なされ、それを生み出す作家が時代の寵児としてもはやされていたことに因る。つまり、こうした様子を目の当たりにしていた彼らと、その影響下にあった人物にとっては、ヨーロッパこそがポスターの本場だったのである。

このような経緯が相まって、日本人にとってのポスターは、当初から広告宣伝物でありながら芸術作品としても存在し、後者の視点で評価する傾向が強かった。特に、石版印刷時代のポスターは、製

作に莫大な費用と手間隙を要したことから、大企業であっても年に1、2種類しか製作しない貴重な広告物であり、半ば「ステータス・シンボル」であったし、ときにはその原画を有名画家に依頼することもあったことから、複製絵画のような精緻な仕上がりのポスターは、非売品の印刷物でありながら、1枚1円から1円50銭の価格で裏取り引きされていた⁽³⁹⁾。このため、日本のポスターの掲出は基本的に室内に限定され、ときには立派な額に収められ、店頭や店内に恭しく「展示」されてもいたし、掲出先におけるポスターは、何よりも店の「飾り」になることが重要視されてきた⁽⁴⁰⁾。

もっとも、こうした日本的なポスターのあり方に対しては、1910年代半ば頃から批判する向きも見られるようになった。具体的には、ポスターにも広告としての本来の目的や役割をより担わせるべく、それにふさわしい直接的なデザインが施されるべきであるという意見が、商業雑誌で散見されるようになったのである。この背景には、当時の日本が大戦景気に沸きかえり、商戦が活発化してくる中で、商略としての広告に対する関心が一般的に高まっていたことに加え、心理学を応用したアメリカの進んだ科学的な広告研究とそれに基づいた新たな手法が、書籍や雑誌を通じて紹介されたことが関係しており⁽⁴¹⁾、こうした考え方は、広告効果を重要視する実業界に支持され、一部ではそれらを実践する動きも起こった。

ただし、日本におけるポスターは、長らく広告物でありながら常に「鑑賞」「収集」される対象であったことから、そこに視覚的な美しさや、芸術作品としての創造性や作家性を求める風潮は根強く、戦争遂行のために製作された大戦ポスターに対しても、同じ価値観をもって眺める傾向は、その後も依然として一定の支持を集めていた。そしてその結果、識者たちの見解は、ヨーロッパの大戦ポスターに対しては、そこに長い美術の歴史や文化的要素に裏打ちされた精神性、及び職人に支えられた技術の高さや、各作家の個性や創造性などを見て取り、それらを高く評価する一方、アメリカの大戦ポスターに対しては、先に挙げたものが稀薄であり、キャッチ・コピーを含めた直接的な表現手法に対しても、それらが広告に求められる訴求力の源となっていることを認めつつも、同時にそこに安直さや浅薄さを感じ、下等と見なしたのである。

ところが、日本で実際に翻案化された大戦ポスターを国別に見ていくと、全般的に好評であったヨーロッパの大戦ポスターよりも、低評価に甘んじたアメリカの大戦ポスターの方が、その実績数としては圧倒的に多い。前述したように、1910年代半ば以降の日本においては、商戦を勝ち抜く手段として広告に対する関心が高まり、依頼主は広告に対しても効果や具体的な結果を求めるようになっていた。つまり、依頼主からの厳しい注文をこなす現場の図案家にとっては、広告宣伝物としての意識が高いアメリカの大戦ポスターの方が、訴求力に優れているだけに見習うべき作品に映ったのである。しかも、それらは何よりもデザイン的に新鮮であったことから、図案家自身にとっても使ってみたい魅力的な素材であったし、現実的な問題として、アメリカの大戦ポスターには無地・無背景のものが多く、翻案化に際しても加工がしやすかった。

なお、翻案化される作品の偏りは、製作国のみならず作品間にも歴然と存在した。例えば、見る者に強い印象を与えるフラッグによる1917年の《アメリカ募兵ポスター》【図13】は、1919年6月28日の『大阪朝日新聞 神戸附録』に掲載された、《岡部印刷事務所の新聞広告》【図12】や、1924年4月11日の『大阪朝日新聞』朝刊5面の《アイフの新聞広告》【図14】のみならず、実は1924年6月3日の『東京朝日新聞』朝刊1面の《スワン万年筆の新聞広告》【図23】や1924年12月16日の『神



図 23 《スワン万年筆の新聞広告》
1924年6月3日
『東京朝日新聞』朝刊1面



図 24 《大日本通信英語研究会の新聞広告》
1924年12月16日
『神戸又新日報』朝刊4面



図 25 《アサヒ地下のポスター》1920年代前半
京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN.3755



図 26 《児童愛護デーのポスター》
1927年4月27日『大阪朝日新聞 三重版』朝刊



図27 《アメリカ第3回自由國債ポスター》
1918年 朝日新聞社『大戦ポスター集』



図28 《復興貯蓄債券のポスター》
1924年 東洋民俗博物館蔵



図29 《帝國生命のポスター》風間四郎
1932年 個人蔵



図30 《太平生命の絵葉書》
1930年代半ば 個人蔵

戸又新日報』朝刊4面の《大日本通信英語研究会の新聞広告》【図24】の下敷きになっており、1920年代後半には《アサヒ地下のポスター》【図25】の誕生を促した。一方、1922年頃とされている《大同生命保険株式会社の絵葉書》【図19】に翻案化された、1918年のパウスによる《アメリカ戦時債券ポスター》【図20】も、1927年には三重県の《児童愛護デーのポスター》【図26】に再び用いられている。その他、『大戦ポスター集』【図4】に70番として紹介された1918年の《アメリカ第3回自由国債ポスター》【図27】は、内容的にも図案的にも使いやすかったらしく、1924年の《復興貯蓄債券のポスター》【図28】を筆頭に、1932年の風間四郎による《帝国生命のポスター》【図29】や、1930年代半ばの《太平生命の絵葉書》【図30】に翻案とされた。そしてここに紹介した作品は、いずれもアメリカ製のポスターである。

アメリカの大戦ポスターがより多く翻案化された理由には、表1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」を見ればわかるように、公開されたポスターの中にアメリカ製の作品が多く含まれ、その公開が早かったことも忘れてはならない。当然のことながら、戦中及び戦後すぐの時点で、第一次世界大戦の戦場と化したヨーロッパへ日本人が渡航することや、同地から物資を持ち出すことはほぼ不可能に近く、従って、ヨーロッパの大戦ポスターを入手する機会は限られがちであった。

ところが、アメリカに関しては、国土が戦場となる危険性がほとんどなかったことから、戦中であっても同国への日本人の渡航や滞在は可能であったし、平時よりは時間と手間はかかったものの、同国から物資を日本に輸送することも不可能ではなかった。このため、1919年2月に大阪府立商品陳列所で開催された「亜米利加美羅絵展覧会」をはじめ、同年6月に農商務省商品陳列館で開催された「米国のポスター展」、及び同年暮れから翌年初めに東京と大阪で開催された「米国戦時ポスター展覧会」には、いずれも大戦ポスターを含む、アメリカで収集されたポスターが展示されており、1918年10月に京都市立商品陳列所において「広告意匠博覧会」を開催するに当たっては、朝日新聞社が収集した大戦ポスターや、神戸高等商業学校の中川静の收藏品も展示された上に、わざわざアメリカのフィラデルフィア市商品陳列館やニューヨークの広告代理店に対して、⁽⁴²⁾ 広告意匠関係物の収集及び送付を依頼し、それらは実際に展示された。

残念ながら、各種「大戦ポスター展」の会場で、どの作品が展示されたかは不明である。しかし、人間の記憶が反復によって固定化されることはよく知られており、展示される機会が多かったアメリカの大戦ポスターが、広告図案を専門に手がける図案家にとっても記憶に残り、それが翻案化につながったことは容易に予想される。また、このことは広告の受容者となる一般市民にとっても同じであり、鑑賞経験のある大戦ポスターを翻案化した方が、彼らの意識に早く容易に入り込み、定着したはずである。そしてそうであるならば、図案家がそのことを逆手にとって、展示機会の多かったアメリカの大戦ポスターを率先して選び、多用したとも考えられる。いずれにしても、大戦ポスターの翻案化に当たっては、デザイン的な優劣のみならず、展示機会の多さも併せて考えていく必要がある。

(3) 翻案化の背景

前節で述べたように、1910年代半ば以降の日本における大戦ポスターは、広告図案を製作する際の格好の参考作品として大いに活用され、またそこにはいくつかの傾向が見られることが分かった。ただし、大戦ポスターが日本でここまで積極的に翻案化された理由についてはまだ検証が不十分であ

り、その背景について改めて述べると以下のようなになる。

第一に挙げられるのは、日本のデザイン界は欧米の美術やデザインの動向を注視しながら、それを模す形で発展してきた歴史を持っていたが、大戦ポスターが紹介され、積極的に受容された 1910 年代半ば～20 年代初めにおいても、その状況が変わらずに続いていた点である。

外国への渡航や同地からの情報の入手が、ままならなかった戦前期の日本においては、新帰朝者もたらす事物は、全ての面で興味深い対象であり、専門職として図案家を擁する企業の中には、参考となりそうな書籍や雑誌を、わざわざ各国から取り寄せていたところも少なくなかった。ただし、それだけに第一次世界大戦の勃発とその長期化は、デザインを必要とする全ての分野にとって、由々しき事態と映った。なぜなら、大戦の影響によって、欧米との交通や物資のやり取りが難しくなり、現地から資料や情報が入ってこない状況は、すなわち創作の糧が得られないことを意味していたからである。

もちろん、実際に戦場と化したヨーロッパにおいては、文化や芸術活動は全般的に停滞を余儀なくされており、前時代までのように、参考とすべきものが次々と生まれていたわけではない。けれども、当時の日本はこれとは対照的に、景気の上昇が広告需要を押し上げ、それまで広告活動にあまり熱心でなかった中小企業までもが、商戦に勝ち抜く手段として広告とそのデザインに対して目を向けはじめていた。そしてその結果、広告の依頼主たちは、より人目を引く斬新なデザインを欲し、その提案を図案家に強く求めるようになった。

こうした状況の中で大戦ポスターは紹介されたのであるから、日本の図案家がそれらを看過せずもなく、大戦ポスターは即座に彼らの新たな糧として受容された。特に、大戦ポスターに見られる無地もしくは無彩色の背景、少ない色数、暗い色調、無骨で粗野な筆致などの特徴は、それまでの日本が欧米のスタイルとして慣れ親しんできた、華やかな色彩や流麗な描線の特徴とする、アール・ヌーヴォー的なデザインとは大きく異なるだけに、図案家たちにとっては新鮮であり、彼らを大いに刺激し、翻案化されることになったのである。

第二に挙げられるのは、大戦ポスターは度重なる報道と公開、及び『大戦ポスター集』【図 4】や『ポスター』【図 5】の刊行によって、日本ではその存在が早くから広く知られ、翻案化される機会が十分に担保された点である。

表 1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」や、表 2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」で示したように、大戦ポスターは、日本では比較的時差なく、また繰り返し紹介されてきた。当然のこととして、こうした大戦ポスターを見る機会の担保は、多くの人々の間での受容を意味している。特に、1921 年に朝日新聞社が主催した「世界大戦ポスター展」は、外地を含む全国 32 カ所で開催され、主催者発表による判明している入場者数の 40 万人は、現在の日本で開催される大規模展覧会でも達成し得ない数字であり、その影響はかなりのものであったと推察される。また、同展に関しては、その記念図録的な『大戦ポスター集』【図 4】が刊行されており、同書は『ポスター集』【図 5】と共に、展覧会を直接見られなかった人々に対して、補完的役割を果たしただけではなく、広告や図案を生業とする専門家にとっては、最新の海外作品が多数紹介された、格好の参考書となった。このため、日本における大戦ポスターの翻案化は、それが頻繁に公開された 1910 年代半ばから 20 年代初めだけではなく、実は日本が本格的な戦時体制に入った 1930 年代後半に再び

起こっており、これを可能とした同書の存在や役割は非常に大きい。

第三に挙げられるのは、広告は話題を集める存在となるために、全般的に新しいものや刺激的なものを好む傾向があり、当時の日本において、第一次世界大戦ほどその要件を満たしたものがなかった点である。

広告は人々に注目され、話題の中心とならなければ、しかるべき役割を果たすことができず、そのためにはさまざまな手段が用いられてきた。例えば、人気俳優や美人で鳴らした芸妓や女優を主題に起用することは、その最たるものとして古くから実行されてきたし、新しいものや珍しいものをモチーフとして取り込むことにも余念がなかった。それが証拠に、日本製ポスターの系譜の一つである木版刷りの引札を見てみると、明治時代の作品には洋装の人物や鉄道や汽船など、文明開化を象徴するような事物が積極的に採用され、それらは時代を表すものとして大いに人気を博した。

翻って、こうした状況における第一次世界大戦であるが、日本人にとってのこの戦争は、当初こそそれほど関心の高いものではなかった。しかし、長期化と拡大の様相を呈するようになると、それは一転して国民最大の関心事となり、終戦に際しては大戦にちなんだポスターまでもが世に出ることになった。その最たる例が、1919年秋に三越呉服店が発表した《三越呉服店のポスター（世界平和）》【図31】であり、「世界平和」を副題に持つ本作において母娘が眺める反物の図柄は、平和を象徴する鳩であり、地色は鳩と縁の深いオリーブ色といった具合に、明らかに第一次世界大戦の終戦を意識している。そして、この頃に製作されたと思われる日本製ポスターを概観すると、このような鳩をあしらった作品が、さまざまな業種で散見されることにも気づく。

戦争とポスターといった場合、一般的には戦意高揚や募兵などを目的として製作される、プロパガンダ・ポスターが連想されやすい。また、負のイメージの強い戦争が、消費や享楽を促す商業ポスターのモチーフとなることに対しては、違和感や驚きを覚えるかもしれない。しかし、広告は平時から話題性を狙って時事的なものを巧みに取り込んで製作されるものであり、日本においては日露戦争後に、その勝利に貢献した軍人と従軍看護婦を主題とした《砂山庄次郎の引札》【図32】が製作された。要するに、戦争とそれにまつわる事物が国民を引き付けるとなれば、それをモチーフとした作品が生まれるのは当然の帰結であり、大戦ポスターの翻案化とその多発化については、図案家はそのデザイン的な斬新さに感化され、自発的にそのような方向に向かったというよりも、こうした状況を踏まえて戦略的に選択した面もあり、翻案化の背景は実は重層的なのである。



図 31 《三越呉服店のポスター（世界平和）》
1919 年秋（株）三越伊勢丹蔵



図 32 《砂山庄次郎ののり札》
1900 年代初め たばこと塩の博物館蔵

IV 現時点でのまとめと今後の課題

これまで述べてきたように、1910 年代半ば以降の日本における大戦ポスターは、度重なる報道と公開、及び書籍の刊行などによって、作品を見る機会が国内で広く担保されたことに加え、それが当時の日本人にとっても関心の高い、第一次世界大戦という世界的な出来事に際して製作されたものであった事実と、デザイン的な新鮮さが相まって、新たなグラフィック作品を創造する際に、積極的に翻案とされた。

なお、本稿においては大戦ポスターからの影響がわかりやすい、比較的直接的な影響が認められる作品を選んで紹介したものの、実際には大戦ポスターから着想を得たような、間接的な影響作品の方が多い。特に、当時の日本においては、着飾った女性を主題とする「美人画ポスター」が人気を博していたことから、ジャンヌ・ダルクや水兵服姿の女性を主題としたアメリカの大戦ポスターは、1921 年 6 月 26 日の『大阪毎日新聞』朝刊 13 面に掲載された「ポスターに描かれた美人」【図 33】が示すように、ある面では新種の美人画ポスターとして認知された⁽⁴⁴⁾。そしてその結果、それらから着想を得た作品が次々に生まれ、1921 年 9 月 7 日の『東京朝日新聞』朝刊 4 面に掲載された《蜂印香竄葡萄酒の新聞広告》【図 34】や、1921 年 11 月 20 日の『大阪毎日新聞』朝刊 8 面に掲載された《中将湯の新聞広告》【図 35】は、そうした一例といえる。

また、大戦ポスターが広く共有化された 1920 年代以降の日本製ポスターを、それ以前の作品と比べてみると、グラフィック作品としての表現の幅が広がっただけではなく、図柄と依頼主や広告対象との関係性や、キャッチ・コピーの役割、タイポグラフィーの重要性など、広告としての目的や役割



図33 「ポスターに描かれた美人」
1921年6月26日『大阪毎日新聞』朝刊3面



図34 《蜂印香雷葡萄酒の新聞広告》
1921年9月7日『東京朝日新聞』朝刊4面



図35 《中將湯の新聞広告》
1921年11月20日『大阪毎日新聞』朝刊6面

について注意を払った作品が、明らかに多くなっている。

いうまでもなく、この背景には一部では熱狂的に支持されていたものの、それまで国内で本格的に紹介される機会に恵まれなかったドイツの作品や、政治的理由によって当局から警戒されていたロシアの作品、及び伝統や文化が乏しいと見なされ、卑下されてきたアメリカの作品などが、大戦ポスターとして紹介されたことが大きい。なぜなら、これらは日本人に対して、ポスターとは何であるかを改

めて考えさせる契機となったからであり、それが当時の図案家と彼らの生み出す作品に、表面的なところから内容的なところまで、直接的にも間接的にも影響を与えたのは確かである。

なお、1945年8月の終戦までを視野に入れ、改めて日本における大戦ポスターの受容と影響を考察してみると、それが真に理解され、研究されるようになるのは、1937年7月の日中戦争開戦以降となる。事実、表1「全国で開催された大戦ポスターが展示された展覧会」に示したように、『読売新聞』に「欧洲大戦當時の列國ポスター紙上展」が30回にわたって連載されたのは、1937年10月5日～11月9日のことであり、『大阪毎日新聞』朝刊には、1937年11月7～17日にかけて「家庭と学芸 祖国は求める 世界大戦當時のポスター集」が10回連載された。そしてこの時期には、表2「第一次世界大戦と大戦ポスターに関する記事」に示したように、1939年9月12～16日に朝日新聞社が主催する形で、松坂屋上野店において東京帝国大学西洋史研究室の教授であった益田元亮が収集した大戦ポスターを公開する「大戦ポスター展覧会」が開催され、同展に関しては『東京朝日新聞』朝刊において、益田元亮による作品解説が9月6～16日まで、10回にわたって連載された。

戦争が具体的かつ身近なものとなったとき、20年前の大戦ポスターは、このように再び取り上げられるようになり、これらは改めて新たな翻案作品の登場を促す一助となった。もっとも、これ以降に製作された翻案作品の方が、本稿でこれまで紹介してきた同様の作品よりも、いろいろな面で遥かに多種多様化している。

こうしたことを踏まえて、今後は戦時下の日本において、大戦ポスターがどのように受容されたかについて、引き続き調査研究を続けていくつもりである。特に、この時期はポスターが主要なプロパガンダ・メディアとして国家によって認識され、宣伝政策の一貫として大量生産・大量消費された時代であり、先に挙げた展覧会や新聞連載についても、当時の国家の宣伝政策と絡めて考察をしていきたいと思う。

註

- (1) 山名文夫 1979「概説・日本の広告美術」東京アートディレクターズクラブ編『日本の広告美術 明治・大正・昭和1 ポスター』pp.20 - 21, 東京:美術出版社。
- (2) 津金澤聡廣 1986「図案家から商業美術家へ」山本武利, 津金澤聡廣『日本の広告 人・時代・表現』p.291, 東京:日本経済新聞社。
- (3) 山野英嗣 1996「ジャーナリズムと美術 戦前の関西における美術界の一動向」『近代日本のメディア・イベント』pp.264 - 265, 東京:同文館出版。
- (4) 印刷博物館編 2007『モード・オブ・ザ・ウォー 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期プロパガンダポスターコレクションより』(展覧会図録)。
- (5) 京都国立近代美術館編 2008『MODERNE DEUTSCHE ドイツ日本ポスター 1890 - 1933』(展覧会図録)。
- (6) 土田泰子 2005「第一次世界大戦期における米国プロパガンダ・ポスター—イメージとプロパガンダ—」『表現文化研究』第1号, pp.1 - 27, 新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- (7) 土田泰子 2006「戦時ポスターとプロパガンダ」『現代社会文化研究』第36号, pp.1 - 18, 新潟大学大学院現代社会文化研究科。
- (8) 田島奈都子 2015「戦争がもたらした製版印刷術の技術革新—大正期の日本印刷界と第一次世界大戦ポスター—」『メディア史研究』第37号, pp.69 - 93, メディア史研究会。
- (9) 姫路市立美術館・印刷博物館編 2007『大正レトロ・昭和モダン広告ポスターの世界 印刷技術と広告表現の精華』p.114, 東京:国書刊行会。
- (10) 中川静處 1916「広告繪札展覧会に就て」『学友會報』第104号, p.293 - 294, 兵庫:神戸高等商業学校学友會。
- (11) 「米國ポスター展覧会」1919, 『愛知県商品陳列館報告』第100号, p.15, 愛知:愛知県商品陳列館。
- (12) 静處生「広告繪札の近事五項」1917『学友會報』第107号, p.531, 兵庫:神戸高等商業学校学友會。
- (13) 『朝日新聞文化事業の歩み戦前編』1995, p.155, 東京:朝日新聞社。
- (14) 「京都広告意匠博覧会に我社出品米國ポスター」1918年10月2日『大阪朝日新聞 京都附録』, 大阪:大阪朝日新聞。
- (15) 柴田三千雄, 木谷勤 1985『世界現代史』p.177, 東京:山川出版社。
- (16) 「欧洲大乱と印刷界(二)」1914『印刷世界』第8巻第8号, p.43, 東京:印刷世界社。
- (17) 註(8)前掲。
- (18) 「英國政府募債ポスター九種」1916『日本印刷界』第78号, p.4, 大阪:日本世界社。
- (19) 「大戦ポスター繪葉書」は後に6枚組がもう1種類追加製作されたことから, 合計3種類存在している。
- (20) 「大戦ポスター集豫約募集」1921年7月11日『大阪朝日新聞』朝刊1面, 大阪:大阪朝日新聞社。
- (21) 「ポスター! 近日着手」1921年6月26日『読売新聞』朝刊1面, 東京:読売新聞社。
- (22) 編纂者「編集記」高原会 1922『ポスター』「ぼすたーのきじ」p.3, 東京:高原会。
- (23) 市田印刷株式会社は1924年に市田幸四郎が東京・田端に起こした印刷会社。市田幸四郎は大阪を本拠地としてポスター印刷に関して名を馳せた市田オフセット印刷株式会社を経営していたが, 同社が1923年に日本精版印刷株式会社に実質的に吸収合併されたことから, 翌年, 東京に移り新たに同社を起こした。
- (24) 前掲, 田島奈都子 2015。
- (25) 菅原教造 1921「刺激としてのポスター」『大戦ポスター集』pp.36 - 37, 朝日新聞社。
- (26) 註(25)前掲。
- (27) 齊藤佳三 1921「ポスター展覧会印象記」『大戦ポスター集』p.98, 朝日新聞社。
- (28) 内海幽水 1921「大戦ポスターの蒐集から展覧会を開くまで」『大戦ポスター集』pp.94 - 95, 朝日新聞社。
- (29) 註(14)前掲。
- (30) 「大戦の貴重な研究資料」1921年4月30日『大阪朝日新聞』朝刊9面, 大阪:大阪朝日新聞社。

- (31) 註(30)前掲。
- (32) 註(30)前掲。
- (33) 中川静 1921「ポスター其他の広告媒体に関する史的観察」『大戦ポスター集』p.53, 大阪:大阪朝日新聞社。
- (34) 「大戦と各國のポスター」1921『大戦ポスター集』pp.78 - 82, 大阪:大阪朝日新聞社。
- (35) 註(34)前掲 pp.79 - 80。
- (36) 田島奈都子 2002「近代日本におけるポスターの受容 明治・大正期のポスター展を中心として」『第一回 竹尾賞 デザイン史研究論文集』pp.50 - 64。
- (37) 植野健造 1996「白馬会展全 13 回の記録」ブリヂストン美術館編『白馬会 明治洋画の新風』(展覧会図録) pp.158 - 252。
- (38) ジョン・バーニコート 1994『ポスター芸術 その発展と変遷』布施一夫訳, pp.41 - 42, 東京:洋版出版。
- (39) 田島奈都子 2013「近代日本の美術界におけるポスターという存在」『近代画説』第 22 号, pp.61 - 69, 明治美術学会。
- (40) 「広告絵ビラの進歩」1912『実業倶楽部』第 2 巻第 2 号, pp.79 - 81, 東京:博文館。
- (41) 山本武利 1986「「広告学」への苦悩」注(2)山本, 津金澤, 前掲書『日本の広告』pp.307 - 313。
- (42) 「広告意匠博覧会前記」1918年『京都』第 47 号, p.10, 京都:京都市商品陳列館。
- (43) 註(39)田島、前掲論文, pp.59 - 62。
- (44) 『大阪毎日新聞』1921年 6 月 26 日付朝刊には「ポスターに描かれた美人」として、5 点の女性を主題としたポスターが写真で紹介されているが、内訳は 2 点が日本製の商業ポスターで、残りの 3 点が大戦ポスターとなっている。ちなみに、前者としては 1916 年の高島屋のポスターとなった北野恒富による《京舞妓美人若松》と 1921 年の《大日本製糖株式会社のポスター》が、後者としては『大戦ポスター集』の 43 番のハリソンによる《アメリカ赤十字看護婦募集のポスター》と、56 番のハワード・チャンドラー・クリスティーによる《アメリカ海軍省募兵ポスター》、94 番のハスケル・コツフィンによる《アメリカ貯蓄奨励ポスター》が取り上げられている。

参考文献

- 東京アートディレクターズクラブ編 1979『日本の広告美術 明治・大正・昭和 1 ポスター』東京:美術出版社
- 山本武利, 津金澤聡廣 1986『日本の広告 人・時代・表現』東京:日本経済新聞社
- 津金澤聡廣編 1996『近代日本のメディア・イベント』東京:同文館出版
- 印刷博物館編 2007『モード・オブ・ザ・ウォー 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期プロパガンダポスターコレクションより』(展覧会図録)
- 姫路市立美術館・印刷博物館編 2007『大正レトロ・昭和モダン広告ポスターの世界 印刷技術と広告表現の精華』東京:国書刊行会
- 京都国立近代美術館編 2008『MODERNE DEUTSCHE ドイツ日本ポスター 1890 - 1933』(展覧会図録)
- 土田泰子 2005「第一次世界大戦期における米国プロパガンダ・ポスター—イメージとプロパガンダ—」『現代社会文化研究』第 34 号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 土田泰子 2006「戦時ポスターとプロパガンダ」『現代社会文化研究』第 36 号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 田島奈都子 2015「戦争がもたらした製版印刷術の技術革新—大正期の日本印刷界と第一次世界大戦ポスター—」メディア史研究会『メディア史研究』第 37 号, ゆまに書房
- 田島奈都子 2002「近代日本におけるポスターの認識とその展開 明治・大正期のポスター展を中心として」pp. 74 - 91 メディア史研究会『メディア史研究』第 13 号, ゆまに書房
- 田島奈都子 2006「近代日本における広告の啓蒙普及と商品陳列所の関わりについて」メディア史研究会『メディ

ア史研究』第21号, pp.105 - 140, ゆまに書房
朝日新聞社 1995『朝日新聞文化事業の歩み戦前編』東京：朝日新聞社
朝日新聞社 1921『大戦ポスター集』東京：朝日新聞社
高原会 1921-22『ポスター 上』『ポスター 下』『ぼすたーのきじ』東京：高原会
田島奈都子 2002「近代日本におけるポスターの受容 明治・大正期のポスター展を中心として」『第一回竹尾賞
デザイン史研究論文集』東京：株式会社 竹尾
ブリヂストン美術館編 1996『白馬会 明治洋画の新風』展覧会図録
ジョン・バーニコート 1994『ポスター芸術 その発展と変遷』布施一夫訳, 東京：洋販出版
田島奈都子 2012「近代日本の美術界におけるポスターという存在」『近代画説』第22号, 明治美術学会
堺市博物館 2010『生誕 150年記念 アルフォンス・ミュシャ展』(展覧会図録)

謝辞

本稿執筆に当たり、下記の機関から図版の借用にご協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

たばこと塩の博物館

昭和館

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

東洋民俗博物館

株式会社三越伊勢丹